

論文の和文要旨

論文題目	日本語の否定文のテンス・アスペクト
氏名	Ruchira Palihawadana

本論は、日本語の動詞否定の四つの形式、シナイ、シナカッタ、シテイナイ、シテイナカッタが文の表す事象を時間的にどのように捉え、現実の世界の中に位置付けるのかを考察することを目的とする。動詞否定のどの形式も述語の出来事の実現を表す。その点において、述語の表す事象がこれから実現するものとして、あるいは既の実現した（実現している、実現していた）ものとして捉える肯定と、否定は性質を異にする。出来事の実現を表す否定接辞が述語動詞に後接することで、文の表す動的な事象がどのような変容を受けるのかということが、本論の重要な研究課題の一つである。

テンス・アスペクトを記述する理論的枠組みとして、Reichenbach(1947)において提案されているものに、後の研究者達が行った修正を加えた枠組みを採用した。この枠組みでは、テンスは参照時 RT と発話時 ST の相対的關係として、アスペクトは参照時 RT と出来事時 ET の相対的關係として捉えられている。

日本語の動詞否定が形態的なテンス区分として表現するのは、無標な非過去と有標な過去の二つのみである。非過去のシナイ形式が現在の時間を表すのか、未来の時間を表すのかということは、文の出来事の種類によって決定される。すなわち、認識活動を表す動詞などはシナイ形式をとって、時間の副詞的な表現や文脈に一切頼らずに、現在の時間を表現するのに対して、動作動詞、変化動詞は未来の時間を表す。動詞否定文が時間の副詞的な表現や文脈に依存しない

で表現するテンス・アスペクト的解釈を、本論では内在的時間指示として扱った。この内在的時間指示が、時間の副詞的表現や文脈によって強化あるいは変更されることがある。時間の副詞的表現や文脈によって与えられる時間指示は、外在的時間指示として捉え記述した。

出来事の種別別にいかなる内在的時間指示が表現されるのかを考察した。テンスは形態においては非過去 ($ST \leq RT$)、過去 ($RT < ST$) に二大別されるが、出来事の種別を考慮に入れると意味においては未来 ($ST < RT$)、現在 ($ST = RT$)、過去 ($RT < ST$) の三つの区分に分類される。アスペクトは、形態において無標な単純アスペクトと有標な複合アスペクトに分類される。単純アスペクトとは、参照時を出来事時から切り離さない時間的な見方である ($RT = ET$)。複合アスペクトの場合には参照時が出来事時から切り離される。複合アスペクトは意味的に、先行性アスペクトと状態性アスペクトに下位分類される。先行性アスペクトとは、出来事時が参照時に先行する時間的な見方 ($ET < RT$) であり、状態性アスペクトとは、参照時が出来事時内に含まれ、断面図的に出来事を眺める時間的な見方である ($RT \subseteq ET$)。

シナイ形式は、内在的時間指示のテンス解釈として現在または未来の時間を表すが、外在的時間指示では過去の時間を表すこともできる。また、発話時に縛られない一般時を表すためにも用いられる。シナイ形式の唯一のアスペクト解釈は、参照時が出来事時から切り離されない単純アスペクトである。シナカット形式は、テンスとして発話時に参照時が先行する過去の時間を、アスペクトとしてシナイ形式同様に単純アスペクトを表す。シテイナイ形式は、内在的時間指示として参照時が発話時に重なる現在のテンスを表すが、外在的時間指示として未来の時間または過去の時間を表現しうる。シテイナイ形式のアスペクトは、出来事時が参照時に先行する先行性アスペクト、または参照時が出来事時内に含まれる状態性アスペクトの二種類である。シテイナカット形式は、シナカット形式同様、テンス解釈として表現するのは過去の時間のみである。アスペクトとしては、シテイナイ形式同様、先行性アスペクト及び状態性アスペクトの二種類を表す。

内在的時間指示では、出来事時及び参照時の時間軸上の位置づけは相対的なものとしてしか行われぬ。これらの時点の時間軸上の具体的な位置づけを行いながら、内在的時間指示を補助あるいは変更するのは、時間の副詞的表現などの外在的時間指示表現である。外在的時間指示表現は、出来事時を発話時または参照時に釘付ける役割を果たす。

Reichenbach(1947)では、時間副詞は常に参照時を規定するものとして捉えられている。しかし、本論では、時間の副詞的表現は出来事時の釘付けを行うものとして扱い、その釘付けの方法に、出来事時を局限しながら釘付ける場合と、参照時を規定しながら局限する場合とがあると考え。このような捉え方をすることで、本論で導入した Reichenbachian 枠組みを、内在的時間指示の記述にのみならず、外在的時間指示の記述にも矛盾なく応用することができると考える。

ダイクシな時間副詞は常に出来事時を発話時に釘付けて局限する。これらが参照時を規定する場合も、必ず出来事時が参照時に釘付けられ、その参照時が発話時に釘付けられるので、

参照時を介して出来事時を発話時に釘付けるのである。これらの副詞は、ある時間帯を出来事時として局限する枠副詞「昨日」など、そして発話時との相対的な時点に出来事時を位置付ける「さっき」などの二タイプに分類することができる。ダイクシスな副詞は、未来、現在、過去というテンス区分に意味的に照応する体系をなす。ダイクシスな枠副詞による出来事時の局限方法は、厳密でないかなりルーズなものであると考えられる。発話時を跨ぎながらその前後に広がっていく時間帯を表す「今日」タイプの枠副詞の場合、否定出来事時が枠全体を満たすことも可能であるが、発話時に先行する部分枠のみを、あるいは発話時に後続する部分枠のみを満たすこともできる。

相対的時点を表すダイクシスな副詞が動詞否定文に共起する場合は、共起制限が多い。これらの表現は、出来事を時間軸の一時点に局限するので、非実現を表す否定と共起するのは困難である。副詞「今に」は全く否定と共起しない。出来事の非実現を参照時直後の未来の時点に局限して捉えることは不可能である。副詞「さっき」の場合も、動詞否定と共起する際に多くの共起制限が働く。否定出来事の開始時点を表す場合（「さっきから」）あるいは終結時点（「さっきまで」）を表す場合は、動詞否定と共起可能である。従って、動詞否定の表す非実現という状態を断面図的に捉えるアスペクト用法を除くと、否定出来事時を一時点に釘付けることは困難であると言わざるを得ない。このことにより動詞否定は状態的性質を持つことを立証される。状態とはある時間帯において均質的に成り立つものであるからである。

アスペクチュアルな副詞「もう」と「まだ」は、動詞否定の非過去形式と共起する場合に、原則的に否定出来事時を発話時に釘付ける。一方、過去形式と共起する場合は、否定出来事時を参照時に釘付ける。しかし、非過去のシナイ形式が未来テンス状態性アスペクト、未来テンス先行性アスペクト、あるいは過去テンス先行性アスペクトを表す場合、否定出来事時を発話時にはではなく参照時に釘付ける。副詞「もう」と「まだ」の共起によって、シナイ及びシナイ形式の内在的時間指示が変更を受ける場合がある。

ある時間帯を表す副詞「しばらく」などは、動詞否定文に共起した場合、否定出来事時の時間量を規定しながら、その開始時点または終結時点を時間軸に釘付ける。否定出来事時が発話時、参照時、または先行する出来事の出来事時などの別の時点に釘付けられる。非過去のシナイ形式の文にこれらの副詞が共起すると、発話時を右端にしなからそれに先行する時間帯を表す場合と、発話時を左端にしなからそれに後続する時間帯を表す場合との二通りの解釈が可能である。前者の解釈は、参照時を出来事時から切り離さない点以外では、先行性アスペクト用法と似ている。

時間帯を表すこの種の副詞は、肯定文の場合には単純アスペクト形式スル、シタと共起不可能であることが工藤（1996）などで指摘されている。しかし、これらはシナイ及びシナカタ形式と共起可能である。肯定文は出来事の実現という一種の変化を表すのに対して、動詞否定は出来事の非実現という、ある時間帯において均質的に存在する状態を表すので、このような非対称性が生じると筆者は考える。少なくとも、否定の表す非実現性には変化の要素が含まれ

ていないと言えるのである。

このように本論は、否定出来事の性質として、状態性、均質性を取り上げた。しかし、状態相というアスペクトカテゴリーに、動詞否定を位置付けようとしたのでは決してない。

本研究は、文を越えた段階での談話におけるテンス・アスペクト研究までには至っていない。二つの文が同時性を表すのか、継起性を表すのかというタクシスの研究が、談話における単純アスペクトと複合アスペクトの使い分け原理を明らかにする上で欠かせないと考えられる。また、談話において、いかにして文から文へと参照時が移動していくのかということも、大変興味深い研究課題である。どのような条件の下で新しい参照時が導入されるのか、新しい参照時の導入と文の表すテンス・アスペクト解釈との間にどのような関連性があるのかということは、テンス・アスペクト研究の今後の課題であろう。これらの課題に取り組むことによって、自然言語において文の表す事象が、どのように世界の事実として位置付けられるのかを明らかにすることができるのであろう。